

# 中期計画策定に向けた議論 フェーズ 1 : IDFIのTOCに関する検討

2025年4月24日

# 全体スケジュール

## フェーズ1：宣言のTOC

### 論点

- IDFIの掲げるVisionの実現に向けて、誰にどのような行動変容を起こしていくべきか？

### 検討スケジュール

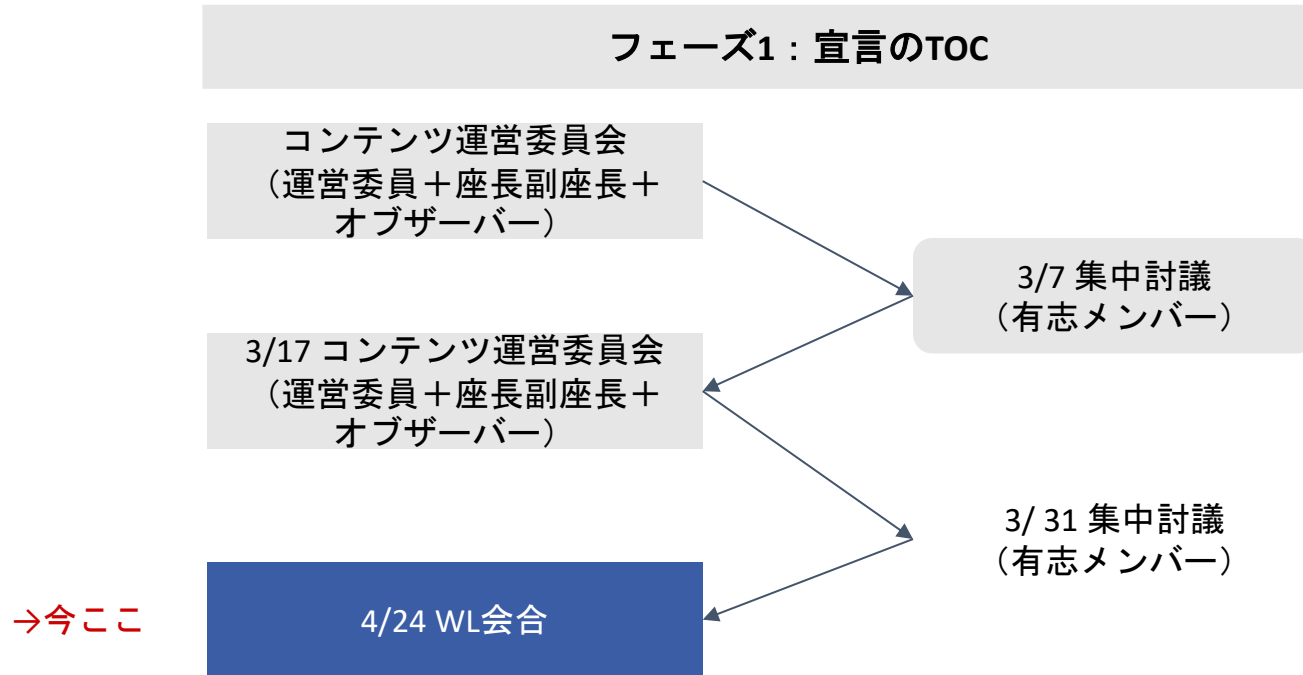
- ~~1月末～2月上旬：事前アンケート実施~~
- ~~～2月中旬：アンケート集計・論点整理~~
- ~~2/17：コンテンツ運営委員会~~
- ~~3/7：TOC集中討議（第一回）15:30-17:30~~
- ~~3/17：コンテンツ運営委員会~~
- ~~3/31：TOC集中討議（第二回）~~
- ~~4月上旬～：事務局にて取りまとめ及び意見招集（書面にて）~~
- **4/24：WL会合にて最終合意**

## フェーズ2：中期計画

- TOC実現のために、IDFIは具体的にどのような活動を行い、どのような成果（アウトプット）を出していくべきか？

- 4月下旬～5月上旬：事前アンケート実施
- ~5月中旬：アンケート集計・論点整理
- 5/18：コンテンツ運営委員会
- 5月下旬：中期計画集中討議（第三回）
- 6/16：コンテンツ運営委員会
- 6月下旬：中期計画集中討議（第四回）
- 7月上旬：事務局にて取りまとめ及び意見招集（書面にて）
- 7/24：WL会合にて最終合意

# 全体スケジュール



# 3/31の集中討議におけるフィードバックと対応方針

- 間接金融の視点を入れるべき
  - 現状のステークホルダーの全体像はいずれもエクイティホルダーのインベストメントチェーンになっている
    - →巻き込むべきステークホルダーの概念図に間接金融のチェーンを追記
- 金融システムのハードの刷新について考慮すべき
  - ビジョンの実現に向けて、アプリケーションの実現だけで達成できないのでは
  - 既存の金融システムはリスク・分散型で高度経済成長を前提としたもの。今後は人口減少の時代、社会課題に自律的に資金が流入していくためには、金融システム自体に意思を持たせる必要がある
  - そのためにはそもそも収益とは何か価値とは何かという事業モデルそのものから考え方が変わっていく必要がある
    - →次ページの同フィードバックと合わせて記載
- 公的資金の流入やブレンデッドファイナンスのような新たな取り組みについても触れるべき
  - →巻き込むべきステークホルダーの概念図に「政府系金融機関」を追記

## 4/15～4/18のアンケートでのコメントと対応方針

- 金融システムのハードの刷新の必要性について
  - 「既存/アップデート後のハード」とは何かを定義するべき。リスク・リターン・インパクトの3軸で考えること？
  - 「リスク分散的な金融システム」「支配的なシステム」などは抽象的すぎる、皆でイメージを共有できるのか？
  - 「支配的なシステム」は誤解を生む表現ではないか？
    - →金融機関がこれまで以上に「意図」を持って能動的に働きかけていく必要があるという点はIDFI内で共通認識を得られているものの、本当に「既存のシステムを前提としてインパクト志向の拡大は実現不可能なのか？」という点では、まだコンセンサスが取れていない状態であると思われる
    - そのため、ドラスティックにハードを変革するべき、という前提でTOCを設計するのではなく、まずは現状のハードをベースとしてソフトの変革を行っていくTOCを設計し、その議論の過程で、より具体的に障壁となるような制度や仕組み（ハード）、あるいは古くから続く金融機関における慣習（OS）が明らかになったところで、それに対してIDFIとしてどのような働きかけをするべきかを検討していく方針とする

## 4/15～4/18のアンケートでのコメントと対応方針

- 「企業」の表記について、発行体か金融機関かを明確にするべき
  - →表記を明確化
- 巻き込むべきステークホルダーとして「アカデミア」も追記すべき
  - →「アカデミア」を追記
- 「インパクトを志向すること＝経済的に合理的な行動である」というのは、飛躍しすぎではないか？
  - → $\alpha$ ではなく $\beta$ に焦点を当てた記載であったため、「システムレベルリスクや $\beta$ の変容を考慮すると長期的に見て合理的な行動である」と修正
- 社会・環境課題の軸でのアプローチについて
  - 共通指標は共感するものの実際計測や開示をしようとする自社内の体制整備+役員レベルの協議・決定が必要なため相当ハードルが高い。SSBJの開示もこれから始まるので、企業の規制開示の中での共通指標を探して行った方が現実的なアプローチではないか
    - →共通指標を設定する難易度を考慮しつつ、具体的なアクションプランについては中計の策定時に検討する方針とする

# TOC策定に向けて答えるべき問い



①IDFIとして目指すべきビジョン

②ビジョンに対する現状認識（ギャップ）

③ビジョンの実現に向けて超えるべき課題（ギャップの埋め方）

④巻き込むべきステークホルダーと起こしたい意識・行動変容

⑤IDFIが果たすべき役割

## ① 目指すべきビジョン

ビジョン

金融機関が扱う資金の流れを可能な限りインパクト志向へと変革させ、  
環境・社会課題を自律的に解決しうる持続的な資金循環を生みだしていく

- 金融システム自体の**自律的な働き**として、環境・社会課題をおのずと解決していくような金融システムになっている状態
- 金融機関が**インパクト志向**のインテンション（意図）を持ち、投資先企業の投融資の判断において、**インパクト/社会価値の視点が当たり前**に組み込まれている状態
- インパクトを志向する企業（発行体）が増えて、インパクト投資の対象の**案件数がより増えている**状態
- インパクト投資の「残高」だけでなく、**アウトカム自体が広がり続けている**



## TOC策定に向けて答えるべき問い（再掲）

① IDFIとして目指すべきビジョン



② ビジョンに対する現状認識（ギャップ）

③ ビジョンの実現に向けて超えるべき課題（ギャップの埋め方）

④ 巻き込むべきステークホルダーと起こしたい意識・行動変容

⑤ IDFIが果たすべき役割

## ② ビジョンに対する現状認識

ビジョン



現状認識

金融機関が扱う資金の流れを可能な限りインパクト志向へと変革させ、環境・社会課題を自律的に解決しうる持続的な資金循環を生みだしていく

- インパクト投資の裾野は徐々に広がり、参画プレーヤーも多様化し、投資残高は増加傾向にあるものの、未だ圧倒的にケースの数が足りていない。また、メインストリームの投資家にとって、リターンや事業性との紐づけがなされておらず、**インパクト投資に対するポジティブな期待値（合理性や納得感）を醸成できていない**。また、大組織においては、インパクトの意義づけや、組織内浸透・フロントへの浸透も課題
- また、インパクト投資のあり方自体も多様化し、「**インパクト投資とは**」何かに対する**明確なコンセンサスがない**ままに、量の増加に対して質のばらつきが起きつつあり、「インパクトウォッシュ」の発生やインパクト投資全体に対する期待値の低下に繋がりがねない
- マクロ視点では社会・環境課題は依然として深刻化しており、インパクトファイナンスによって、どれだけ新たな資金が課題解決に流入し、**世界の社会・環境課題は解決されているのか、アウトカムが可視化されていないため、確証を得られていない**
- このような状況下において、1社での対応では限界があり、**システムレベルリスクへの対応やシステム思考の必要性も浮上**

## TOC策定に向けて答えるべき問い（再掲）

① IDFIとして目指すべきビジョン

② ビジョンに対する現状認識（ギャップ）



③ ビジョンの実現に向けて超えるべき課題（ギャップの埋め方）

④ 巻き込むべきステークホルダーと起こしたい意識・行動変容

⑤ IDFIが果たすべき役割

### ③ ビジョンの実現に向けて超えるべき課題

- 1) **インパクト志向に変革することに対する「合理性」・「納得感」の醸成**
  - インパクトと企業価値の関係性の明確化/事業評価へのインパクトの組み込み
  - システムレベルリスクの理解浸透
  - インベストメントチェーン全体でのインパクト志向の拡大
- 2) **多様なインパクト投資のあり方の類型化及び先進事例の創出**
  - アセットクラス別の狭義のインパクト投資の整理（現在すでに浸透しているもの）
  - IMMを伴わないImpact Aligned Investments、Instrumental IFSIなどを含めた広義でのインパクト投資の類型化と基準の明確化
  - 上記の類型化に基づく先進事例の創出
    - ラベリング・表彰制度などによるインセンティブの設計
    - 第三者保証・認証などによる客観的な品質保証の仕組み構築
- 3) **社会・環境課題を起点とした横断的・包括的なアプローチ**
  - 社会・環境課題を起点とした横断的なインパクトファイナンスのスキーム/イニシアチブの確立
  - インパクト投資によって創出されたインパクトの可視化・マネジメント（企業の成長ステージ毎、サプライチェーンのプロセス毎の資金の担い手とその後の商品→顧客につながるアウトカムの可視化）/システムレベルリスクの検討・把握

## TOC策定に向けて答えるべき問い（再掲）

① IDFIとして目指すべきビジョン

② ビジョンに対する現状認識（ギャップ）

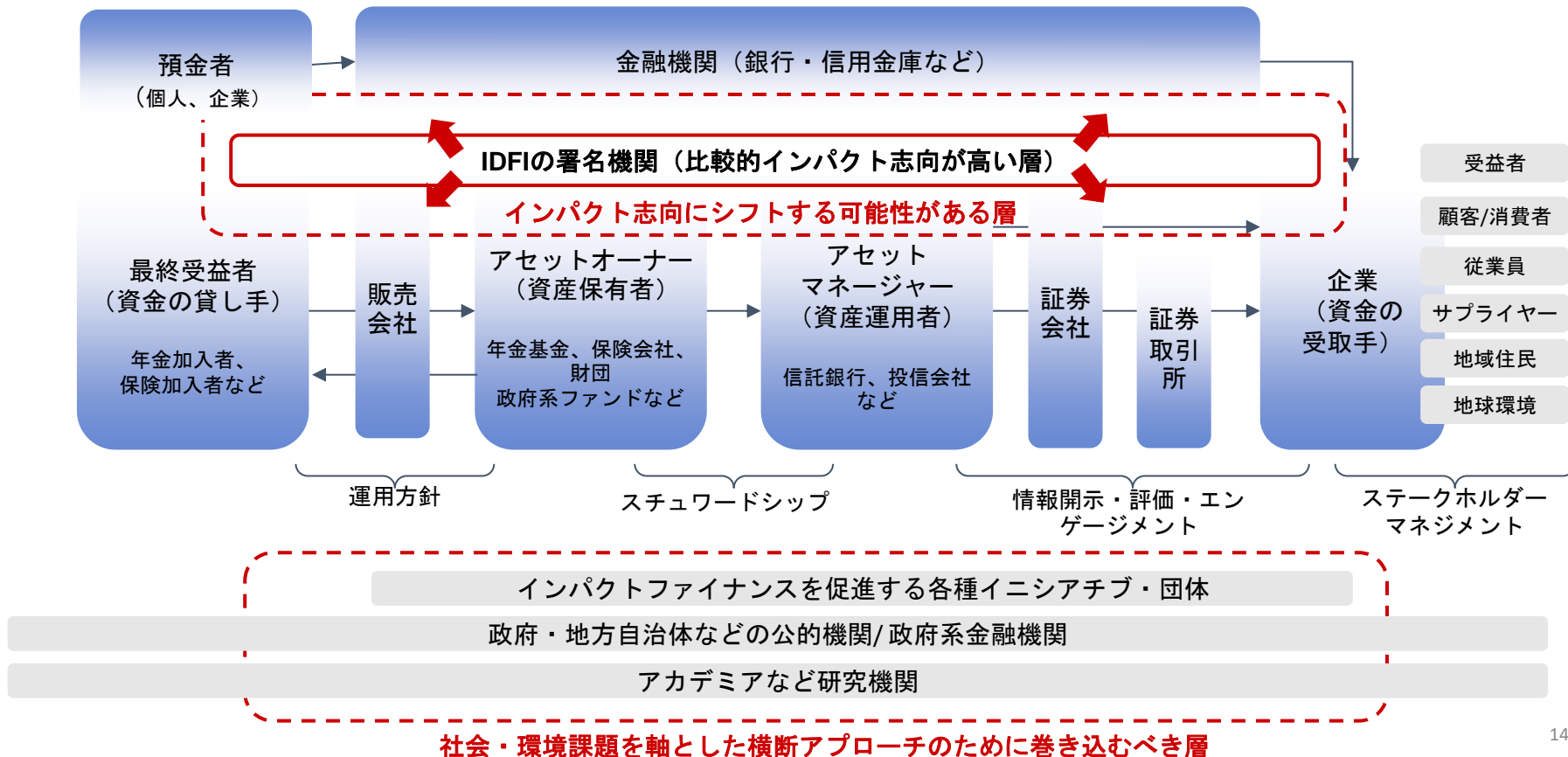
③ ビジョンの実現に向けて超えるべき課題（ギャップの埋め方）



④ 巻き込むべきステークホルダーと起こしたい意識・行動変容

⑤ IDFIが果たすべき役割

# ステークホルダー全体像と巻き込むべきターゲット層



ビジョンの実現に向けて、前述の3つの課題を解決していくことで、誰にどのような意識・行動変容を起こすべきか？（事務局仮説）

- 1) インパクト志向に変革することに対する「合理性」・「納得感」の醸成
  - 現時点でインパクト投資家ではないが資本市場におけるマジョリティを占める投資家の意識変容を起こしていくことが鍵となるのでは
    - 「インパクト=期待する財務リターンを見込めない」→「システムレベルリスクや $\beta$ の変容を考慮すると長期的に見て合理的な行動である」

## ビジョンの実現に向けて、前述の3つの課題を解決していくことで、誰にどのような意識・行動変容を起こすべきか？（事務局仮説）

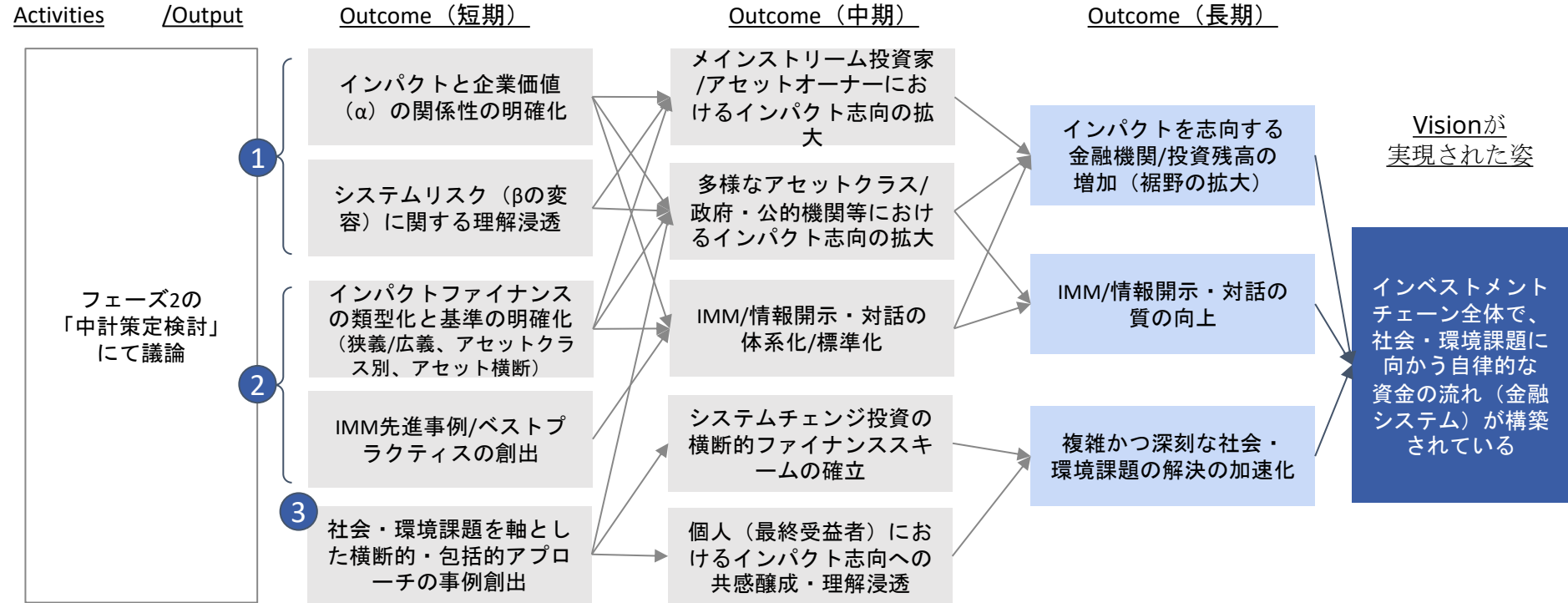
- 2) 多様なインパクトファイナンスのあり方の類型化と裾野の拡大
  - 厳密なIMMは具備できていないがこれからインパクト投資に取り組みたいと考えている金融機関、あるいはそもそもアセットクラス特性上、IMMとの相性が合わないと感じている金融機関における行動変容が鍵となるのでは
    - 「インパクト投資＝高度なIMMをしていなければウォッシュと言われる、自社には難しい/そぐわない」→「インパクトを考慮した投資」（広義）であれば自社にも取り組める余地がある/意義がある」
  - また一方で、IMMの先進事例として業界をリードするプレーヤーにおいては、業界全体のIMMの質の向上に貢献してもらえるような行動を促す必要があるのでは（その際には表彰や認証において影響力のあるメディアや機関を巻き込むことが重要）
    - 「インパクトの参入障壁が下がりすぎること、自社だけが質の高いIMMに取り組んでいても、ウォッシュの対象となりかねない」→「自社のIMMを進化させ業界に共有していくことは自社の競争優位性につながる」



## ビジョンの実現に向けて、前述の3つの課題を解決していくことで、誰にどのような意識・行動変容を起こすべきか？（事務局仮説）

- 3) 社会・環境課題を起点とした横断的・包括的なアプローチ
  - 同一の社会・環境課題解決を試みる金融機関やインパクト企業に、**横断アプローチに参画するベネフィットを実感**してもらい、より多くの金融機関や企業に参画してもらうことが重要（＝すなわち**システム思考の浸透**）
    - 「課題の理解度を高めるための深掘りやインパクトの定量調査にかかる費用負担がIMMに取り組むハードルとなっている」→「**自社だけで取り組むよりも、より効率的に課題解決を実現できる（課題マッピングの共有、共通指標の活用、インパクト指標集計の共通化、課題解決のスピードアップ）**」
  - また、実際に社会・環境課題軸で金融機関が連携して取り組むスキームを構築する際には、**社会・環境課題に精通した各種団体や、中央省庁・地方自治体なども巻き込みながら課題別のイニシアチブ**を形成し、そこにインテンションのある金融機関や企業が参画し、連携できるようなプロジェクトの構築が必要

## TOC（事務局ドラフト）



ビジョン：金融機関が扱う資金の流れを可能な限りインパクト志向へと変革させ、  
環境・社会課題を自律的に解決しうる持続的な資金循環を生みだしていく

## 現状課題

インパクト志向の  
浸透が限定的

インパクト投資の定義  
の曖昧さ・多様化による  
ウォッシュの懸念

個社レベルのインパクト  
投資の限界

## アプローチ

（巻き込むステークホルダーと起こしたい行動変容）

### ① メインストリームの投資家/アセットオーナーの巻き込み

- インパクト創出と企業価値の関係性の明確化による納得感の醸成
- システムレベルリスクの理解浸透/Instrumental IFSIなどの普及による合理性・納得感の醸成

### ② インパクトファイナンスの定義の拡大と質の引き上げ

- 広義を含むインパクトファイナンスの類型化と実践ガイドの整備による新規参入者の巻き込み（Impact Aligned Investmentsなど）
- IMMの先進企業の事例共有・形式知化による質の引き上げ

### ③ 社会・環境課題を軸としたアセットクラス横断の連携強化

- 社会・環境課題を軸としたアセットクラス横断のファイナンススキームの確立と事例創出（多様なアセットクラス、公的機関や非営利団体などの巻き込み）

## アウトカム

裾野の拡大

IMM/エンゲージメントの  
高度化

社会・環境課題  
解決の加速化